軽度発達障害児・者の自尊感情について
―自尊感情尺度（ＳＥ尺度）および熊大式コンピタンス尺度を用いた検討―

一　門　惠　子・住　尾　和　美[1]・安　部　博　史

軽度発達障害を持つ者は、環境刺激の処理、コミュニケーション、微細運動を含む様々な運動における一次的な障害や、それらより派生する二次的な障害により、学校および日常において様々な困難さを抱きながら生活を送っていると考えられている。彼らは、学業、日常動作や様々な課題において、他者よりも多くの努力や時間を必要とし、結果的に失敗に終わってしまうことも少なくない。このような経験を積み重ねることで、様々な課題に対して苦手意識を持ってしまったり、意欲の低下から課題に取り組むこと自体を避けてしまったりするような場合すらある。このような課題への取り組みを避ける行動傾向が、結果的に潜在的な発達の機会を逃してしまい、悪循環のプロセスを辿ることも容易に推測される。学校や日常における課題に対する自己効力感の低下や、他者から低い評価を下されることに起因する自己受容の難しさなどが、自尊感情の低さに繋がっていることが想像される。

これまで、障害をもつ児童の自尊感情についての検討としては、吃音児において、吃音を受容できずにやりたいことをあきらめたり、話す場面を避けたりするなどの社会的不適応を示している児童が自尊感情の低下を抱えているという報告がある（Van Riper、1971）。また、太田らは、吃音児の自尊感情の因子構造が、非吃音児のそれとは異なっていることを明らかにしている（太田・長澤、2004）。一方、軽度発達障害を持つ者の自尊感情に関する検討は、軽度発達障害という概念そのものの歴史が浅いこともあるためか、極めて少ない状況にある。例えば、松本らはＡＤＨＤ傾向の高い児童が、そうではない児童に比べ自尊感情が低いことを報告している（松本・山崎、2006）。ＡＤＨＤ傾向を持つ者の自尊感情の低下を報告する同様の報告が存在する（下津・井筒ら、2006；鈴木・中野、2002）一方で、健常児と有意な差はないことも報告されている（増田・福原ら、1998）。このように、ＡＤＨＤを持つ者における自尊感情に関する検討はその数も少ないほか、一致した見解が得られていない現状がある。さらに、ＡＤＨＤ以外の軽度発達障害を持つ者を対象とした研究状況は、ＡＤＨＤを持つ者を対象にした研究とほぼ同様かそれよりも貧弱である。

そこで本研究では、軽度発達障害をもつ児童、生徒および学生の自尊感情と自己効力感について検討することを目的とした。具体的には、自尊感情尺度（太田・長澤、2004）と熊大式コンピタンス尺度（篠原・勝俣、2000）を用いて、①軽度発達障害群（注意欠陥・多動性障害をはじめ、高機能自閉症、アスペルガー症候群、学習障害を持つ者）における自尊感情・自己効力感の様相および、②軽度発達障害群と対照群の間にどのような異同が認められるかを吟味した。

方　法

調査対象

20.9±5.1歳（平均±標準偏差、範囲13～29歳）の知的な遅れを伴わない、学習障害（ＬＤ；８名）、高機能自閉症（ＨＦＡ；10名）、アスペルガー症候群（ＡＳ；10名）、注意欠陥・多動性障害（ＡＤＨＤ；２名）の診断をうけた30名（男性23名、女性７名）の者を軽度発達障害群とした。一方、軽度発達障害群と年齢、性別を一致させ、上述の障害をもたない者30名（男性23名、女性７名）を対照群とした。

調査内容

自尊感情尺度（Self efficacy scale：ＳＥ尺度）：自尊感情を測定するために、井上により「児童期の自尊心尺度」として作成され（井上、1986）、太田らによって改訂された（太田・長澤、2004）42項目からなる自尊感情尺度を用いた。対象者は「はい、どちらともいえない、いいえ」の三件法による回答を行い、自尊感情レベルの高い順に３～１点が与えられた。本研究では、軽度発達障害群と対照群の合計得点の比較を行ったほか、吃音児の自尊感情尺度得点に対し因子分析を行い抽出された４つの因子（太田・長澤、2004）についての検討を行った。すなわち、①自信因子（13項目）、②達成動機因子（13項目）、③自己受容因子（10項目）、④家族からの受容因子（６項目）についても軽度発達障害群と対照群の得点の比較を行った。

熊大式コンピタンス（勝俣・篠原、2000）：自尊感情に類似した概念である自己効力感を測るもので、Harter（1982）の開発した「児童用の認知されたコンピタンスの尺度」をモデルにして作成されている。認知的、身体的、社会的、生活、総合的自己評価の５要因のコンピタンス、35項目から構成されており、主として児童生徒（小学校高学年）から大学生までの年齢層を適用範囲としてできるだけ平易な文章で作成されている。各項目においては、コンピタンスレベルの高い順に４～１点を与えることで回答を行った。

結　果

Ⅰ．自尊感情尺度（ＳＥ尺度）の結果（Table１、２）

対象者の自尊感情を測るために調査を行った。尺度の得点は、自尊感情レベルの高い順に３～１点を与えた。合計得点については全質問項目数（42）で除した値、各因子の得点については各項目数で除した値を分析に用いた。軽度発達障害群と対象群における合計点および各因子の得点差の検定には、ｔ検定と一要因の分散分析を用いた。ＬＤ／ＡＤＨＤ群の１名が回答を拒んだため、軽度発達障害群の29名を分析の対象とした。

Table１．自尊感情尺度得点における軽度発達障害群と対照群の比較（平均値±標準偏差）

	合　計	自　信	達成動機	自己受容	家族受容
軽度発達障害群（Ｎ＝29）	2.19±0.28*	2.05±0.38**	2.38±0.34	1.92±0.31†	2.47±0.42
対照群（Ｎ＝30）	2.36±0.31	2.36±0.37	2.45±0.36	2.11±0.39	2.59±0.39

† p＜.10、＊p＜.05、＊＊p＜.001

Table１に軽度発達障害群と対照群の自尊感情尺度得点の結果を示した。自尊感情尺度の合計得点においては、軽度発達障害群（2.19±0.28；平均得点±標準偏差）が、対照群（2.36±0.31）より有意に低いことが示された（ｔ＝－2.24、ｐ＜.05）。自信因子においては、軽度発達障害群の得点（2.05±0.38）が、対照群（2.36±0.37）よりも有意に低かった（ｔ＝－3.22、ｐ＜.01）。達成動機因子においては、軽度発達障害群（2.38±0.34）と対照群（2.45±0.36）の間に有意な差は見られなかった。自己受容因子においては、軽度発達障害群の得点（1.92±0.308）は、対照群（2.11±0.39）よりも低い傾向が示された（ｔ＝－1.99、ｐ＜.１）。家族受容因子においては、軽度発達障害群（2.47±0.42）と対照群（2.59±0.39）の間に有意な差は見られなかった。

Table２．自尊感情尺度得点におけるＨＦＡ群・ＡＳ群・ＬＤ／ＡＤＨＤ群と対照群の比較

	合　計	自　信	達成動機	自己受容	家族受容
ＨＦＡ群（Ｎ＝10）	2.14±0.29	2.02±0.39*	2.35±0.36	1.88±0.22	2.38±0.37
ＡＳ群（Ｎ＝10）	2.22±0.21	2.06±0.30*	2.4±0.28	2.05±0.32	2.44±0.50
ＬＤ・ＡＤＨＤ群（Ｎ＝９）	2.2±0.35	2.07±0.49*	2.38±0.42	1.83±0.36	2.59±0.39
対照群（Ｎ＝30）	2.36±0.31	2.36±0.37	2.45±0.36	2.11±0.39	2.59±0.39

＊ｐ＜.05（対照群との比較）

Table２にＨＦＡ群、ＡＳ群、ＬＤ／ＡＤＨＤ群と対照群の自尊感情尺度得点を示した。ＨＦＡ群、ＡＳ群、ＬＤ／ＡＤＨＤ群、対照群の４群の合計得点および各因子の得点について、一要因の分散分析を行ったところ、自信因子においてのみ有意な差が見られた（Ｆ(3, 55)＝3.36, ｐ＜.05)。そこで、FisherのＰＬＳＤ法を用い多重比較を行ったところ、ＨＦＡ群、ＡＳ群、ＬＤ／ＡＤＨＤ群の得点が、対照群よりも有意に低いことが明らかとなった（それぞれｐ＜.05)。その他の因子および合計得点において群間に有意な差は見られなかった。

Ⅱ．熊大式コンピタンス尺度の結果（Table３、４）

対象者の自己効力感を測るために調査を行った。尺度の得点は、自己効力感の高い順に４～１点を与えた。軽度発達障害群と対照群における各因子の差の検定には、ｔ検定と一要因の分散分析を用いた。

Table３．熊大式コンピタンス尺度における軽度発達障害群と対照群の比較

	認　知	身　体	社　会	生　活	総合的自己評価
軽度発達障害群（Ｎ＝30）	2.49±0.66	2.39±0.65	2.42±0.64	2.62±0.67	2.55±0.71
対照群（Ｎ＝30）	2.75±0.60	2.93±0.51**	2.75±0.57*	2.77±0.58	2.66±0.64

＊ｐ＜.05、＊＊ｐ＜.001

Table３に熊大式コンピタンス尺度における、軽度発達障害群と対照群の得点を示した。認知的コンピタンスにおいて、軽度発達障害群の得点（2.49±0.66）と対照群（2.75±0.60）の間に有意な差は見られなかった。身体的コンピタンスにおいては、軽度発達障害群の得点（2.39±0.65）が、対照群（2.93±0.51）よりも有意に低い得点であることが示された（ｔ＝－3.54、ｐ＜.001)。社会的コンピタンスにおいても、軽度発達障害群の得点（2.42±0.64）は、対照群（2.75±0.57）

よりも有意に低かった（t＝－2.11、p＜.05）。生活コンピタンスにおいて、軽度発達障害群（2.62±0.67）と対照群（2.77±0.58）の得点の間に有意な差は見られなかった。総合的自己評価においても、軽度発達障害群（2.55±0.71）と対照群（2.66±0.64）の得点の間に有意な差はみられなかった。

Table４．熊大式コンピタンス尺度におけるＨＦＡ群・ＡＳ群・ＬＤ／ＡＤＨＤ群と対照群の比較

	認知	身体	社会	生活	総合的自己評価
ＨＦＡ群（N＝10）	2.62±0.71	2.50±0.88	2.25±0.64*	2.56±0.79	2.49±0.74
ＡＳ群（N＝10）	2.58±0.59	2.40±0.51*	2.75±0.51	2.73±0.45	2.76±0.66
ＬＤ・ＡＤＨＤ群（N＝10）	2.27±0.66	2.27±0.57**	2.25±0.69*	2.60±0.65	2.40±0.75
対照群（N＝30）	2.76±0.60	2.93±0.51	2.75±0.57	2.77±0.58	2.66±0.64

*p＜.05、**p＜.001（対照群との比較）

Table４に、ＨＦＡ群、ＡＳ群、ＬＤ／ＡＤＨＤ群、対照群の４群の熊大式コンピタンス尺度得点を示した。各因子における４群の得点を対象として、一要因の分散分析を行ったところ、身体的コンピタンスおよび社会的コンピタンスにおいて、有意な差が見られた（それぞれ、F（3, 56）＝4.45、p＜.01；F（3, 56）＝3.15、p＜.05）。そこで、それぞれの因子において、FisherのＰＬＳＤ法を用い多重比較を行ったところ、身体的コンピタンスにおいては、ＡＳ群とＬＤ／ＡＤＨＤ群の得点が、対照群よりも有意に低く（それぞれ、p＜.05、p＜.001）、社会的コンピタンスにおいては、ＨＦＡ群とＬＤ／ＡＤＨＤ群の得点が、対照群よりも有意に低いことが明らかとなった（両者とも、p＜.05）。

Ⅲ．自尊感情尺度と熊大式コンピタンス尺度の相関

自尊感情尺度の４因子および熊大式コンピタンス尺度の５因子の平均得点の相関をFig. １に示した。軽度発達障害群における相関係数（r）は0.74、対照群における相関係数は0.85と、両群ともに有意に高い正の相関がみられた（両者とも、p＜.01）。

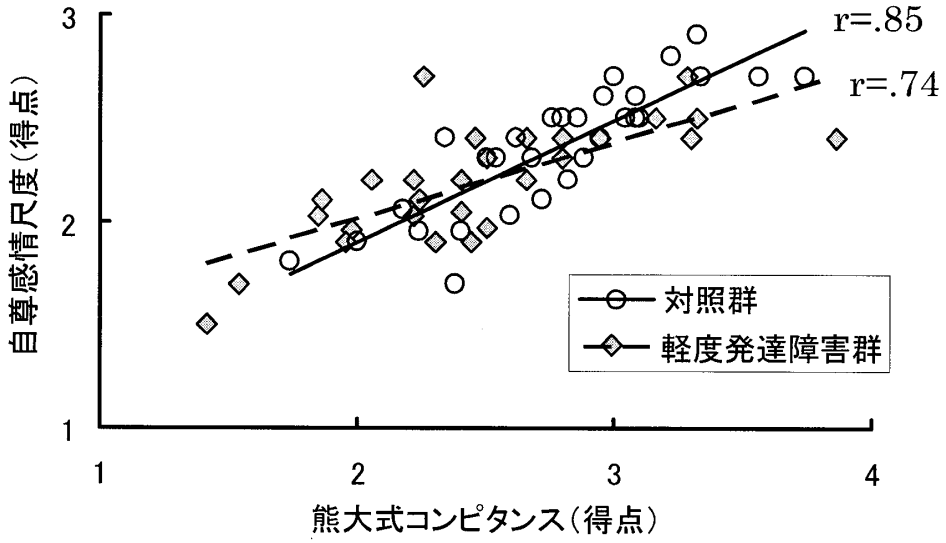

Fig. １　自尊感情尺度と熊大式コンピタンス尺度の相関

考　察

Ⅰ．自尊感情尺度（ＳＥ尺度）について

自尊感情を測るために42項目からなる自尊感情尺度（太田・長澤、2004）を用いた。回答には「はい、どちらともいえない、いいえ」の三件法を用い、自尊感情レベルの高い順に３～１点を与えた。その結果をｔ検定と一要因の分散分析を用いて分析を行った。その結果、軽度発達障害群の合計得点が、対照群よりも有意に低いことが示され、軽度発達障害群の自尊感情が対照群よりも低い状態にあることが示唆された（Table１）。さらに詳細に検討するため、因子毎に検討を行ったところ、「自信因子」において、軽度発達障害群の得点が、対照群よりも有意に低かった。また、同因子においては、ＨＦＡ群、ＡＳ群、ＬＤ／ＡＤＨＤ群のすべての群の得点が、対照群よりも低いことが明らかになった（Table２）。太田ら（2004）は自信因子を「勉強や運動が得意であったり決めたことをやり通したり、学校でやりたいことに取り組めているなど、自分のよさに自信を持っていることを示す。」と説明している。学校、家庭を含む様々な局面で失敗を繰り返し、成功感や成就感を味わうことが少ない彼らがそのような自信を持つのは容易な事ではないであろう。このような軽度発達障害を持つ者における「自信」の低さが、自尊感情の低さと密接に関連していることが示唆された。

「自己受容因子」においては、軽度発達障害群の得点が、対照群よりも低い傾向にあることが示された（ｐ＜.10）。自己受容因子とは、「友だちからの評価を気にせず、また自分を恥ずかしいと思わずに自己を受容していることを表す」と説明されている（太田・長澤、2004）。軽度発達障害群は対照群と比べて運動が苦手だったり、勉強が苦手だったり、失敗を繰り返してしまうケースが多いことが予測される。他者から低い評価を受けていると感じ、そのような低い評価の自己を受容できないという状況が推測された。そして、このような軽度発達障害群における「自己受容」の低さが、自尊感情の低さの一端を担っていることが示唆された。

一方、「達成動機因子」や「家族受容因子」では、軽度発達障害群と対照群の間に有意な差は見られなかった。「失敗しても頑張りたい」などの達成動機は損なわれておらず、また「家族から受容されている」という感じは保たれている。対照群よりも低い傾向にある因子に対する配慮はもちろん必要であるが、このように低下のみられない因子を低下させることのないように留意しなければならないであろうし、また最大限活用するような支援が重要であろう。

本研究で用いた自尊感情尺度における４つの因子（自信、達成動機、自己受容、家族受容）は、吃音児の自尊感情の因子分析によって抽出された因子である（太田・長澤、2004）。吃音児の自尊感情の因子構造が、本研究で対象とされた軽度発達障害群のそれと一致している保証はなく、軽度発達障害者の自尊感情の因子構造については今後検討する必要があると考えられる。

Ⅱ．熊大式コンピタンス尺度について

対象者の自己効力感を測るために熊大式コンピタンス尺度を用い調査を行い、コンピタンスレベルの高い順に４～１点を与えた。その結果をｔ検定と一要因の分散分析を用いて分析を行った。その結果、身体的コンピタンスおよび社会的コンピタンスにおいて、軽度発達障害群の得点が、対照群よりも有意に低いことが示された（Table３）。各因子において、さらに詳しく検討したところ、身体的コンピタンスにおいては、ＡＳ群とＬＤ／ＡＤＨＤ群の得点が対照群よりも有意に低く、ＨＦＡ群と対照群の間に有意な差は見られなかった（Table４）。身体的コンピタンスには、

身体的形態や生理的機能、運動能力、身体的健康、身体的行動の成分が含まれている。質問項目をさらに詳細に分析してみると、最も低い得点だったのは「体力があるか」についてと「運動が得意か」という２項目だった。発達障害を持つ者においては、全般的に運動に対する不器用さが指摘されているが、本研究の結果はこの事実と密接に関連していると考えられた。

一方、社会的コンピタンスにおいては、ＨＦＡ群とＬＤ／ＡＤＨＤ群の得点が、対照群よりも有意に低く、ＡＳ群と対照群の間に有意な差は見られなかった（Table４）。社会的コンピタンスには、自己開示性、友好性、協調性、社会的交流、リーダーシップの成分が含まれている。質問項目を詳細に検討してみると、「仲間が多いか」についてと「人から好かれやすいか」という２項目で差が見られた。集団生活において人間関係を構築することが苦手であるといわれる軽度発達障害群の臨床像と一致する結果であった。ただし、ＡＳ群と対照群においては有意な差が見られず、興味深い結果となった。

Ⅲ．自尊感情尺度と熊大式コンピタンス尺度の相関

軽度発達障害群における自尊感情尺度と熊大式コンピタンス尺度の相関係数は0.74、対照群における相関係数は0.85と、両群ともに有意に高い相関となった（Fig. １）。軽度発達障害群においても、対照群と同様に、自尊感情尺度や熊大式コンピタンス尺度の問題文の意味を充分に理解しており、安定した自己評価を得ることができることが示唆された。

また、軽度発達障害群および対照群の両群において、自尊感情尺度と熊大式コンピタンス尺度の得点の相関が有意に高かったことより、自尊感情とコンピタンスが類似の概念であり、両尺度によって測定される構成概念が極めて近いものであることが確認された。しかしながら、両尺度における因子は互いに異なること、および軽度発達障害群と対照群で有意な差がみられた因子に独自性があることなどから、今後両尺度の因子の相関などについて吟味する必要がある。

Ⅳ．おわりに

筆者らは、軽度発達障害を持つ者たちとの関わりの中で、教育の場においてさえ、彼らの障害特性に関する正確な理解が十分でないことや、満足な支援が行われていないことを痛感している。「私には出来ないもん」とか、「皆、私のこと好きじゃないんだ」などの言葉や、すぐに謝る行動傾向のある者たちを見ると心が痛む。そのような状況を目の当たりにして、軽度発達障害群の自尊感情が低くなってしまっているのではないかと感じていた。

自尊感情尺度や熊大式コンピタンス尺度においては、軽度発達障害群の自尊感情得点が、対照群に比べ低いという結果が得られた。軽度発達障害群は、「自信」を持つことが難しく、「自己受容」も低くなっていることが示唆された。このような結果は、彼らだけの問題ではなく、周囲にいる我々の問題のような気がしてならない。自己受容は、他者が自分をどう捉えているかによって大きく影響を受ける。彼らが失敗した時、悩み、自己嫌悪に陥っても、周囲の者が受容し、暖かく見守れば、自尊感情の低下を防げるのではないだろうかと思われた。

なお、本研究実施にあたり、ご協力頂いた調査協力者およびご家族の方々に深く感謝致します。

注

1　2007年度　人文学研究科障害心理学専修発達障害領域専攻修了．現学級支援員（熊本市）

参　考　文　献

Harter, S. (1982). The perceived competence scale for children. Child Development, 53, 89-97.

井上信子．(1986)．児童の自尊心と失敗課題の対処との関連．教育心理学研究，34，10－19.

増田ユキ子・福原昭二・望月紀子．(1998)．注意欠陥多動性障害（ＡＤＨＤ）患者の自己尊重―自己尊重測定とエゴグラム・ＳＣＴ検査―．小児看護，29，70－72.

松本陽子・山崎由可里．(2006)．小学生におけるＡＤＨＤ傾向と自尊感情．和歌山大学教育学部紀要，57，43－52.

太田真紀・長澤泰子．(2004)．学齢期における吃音児の自尊感情の発達―非吃音児の自尊感情との比較―．特殊教育学研究，41，465－474.

下津咲絵・井筒節・松本俊彦・岡田幸之・柑本美和・野口博文・菊池安希子・滝沢瑞枝・吉川和男．(2006)．中学生における多動傾向と自尊感情の関連．精神医学，48，371－380.

篠原弘章・勝俣暎史．(2000)．熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性：小学生の「感情・態度」および「希望」との関係．熊本大学教育学部紀要，49，93－108.

鈴木智子・中野明徳．(2002)．学習障害，注意欠陥多動性障害の子どもたちの自尊心―「ほめる」ことに焦点を当てた関わり―．福島大学教育実践研究紀要，42，71－78.

Van Riper, C. (1971). The nature of stuttering. Prentice Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.